

# 「源氏千種香」の依拠本を探る

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 武居 雅子

「源氏千種香」は、元文年間に江戸で菊岡沾涼によりとりまとめられ、成立したと考えられる香の伝書『香道蘭之園』の八・九巻に掲載されている組香（香りを聞き当てる香遊び）である。源氏物語五十四帖のうち「桐壺」「夢浮橋」を除いた五十二帖を題材とし、他の香の伝書や組香集には見られない珍しい組香である。

香道実技の場において、「源氏千種香」は『源氏物語』に基づいて考案された文学性豊かな組香と考えられてきたが、内容を精査してみると、原典の『源氏物語』と明らかに異なる事象が存在している。物語には見られない和歌が組香の証歌とされていたり、物語にはない言葉が聞きの名目に使われていたり、巻の順序が違っていたり、重要な場面での登場人物に欠落があったりと、必ずしも忠実な物語の再現はなされていないのである。しかし、組香考案者やその後継者によって、安易な物語の内容改編が行われたとは考えにくい。

香道の歴史を顧みると、その創成に関わった人に連歌の関係者が多いことが注意される。一方、連歌の隆盛にともない、源氏物語の言葉（源氏寄合）を用いた句が多く詠まれるに至り、その教則本として『源氏物語』の梗概書が機能した事実が知られている。これらのことから、「源氏千種香」も原典の物語を直接の典拠としたのではなく、いずれかの梗概書を経て考案されたものではないか、という考えに至った。

そこで、巻順の異同を手がかりに梗概書を調査したところ、中世から近世にかけて最も流布したといわれる『源氏小鏡』のそれとほぼ同じであることを確認した。さらに本稿で取り上げた「簪木香」の証歌、「玉葛香」の衣配り、「梅枝香」の薫物合、「若菜香下」女楽と、『源氏小鏡』第一系統（古本系）第一類京都大学本（伝持明院基春筆）の記述に、共通点があることを見出した。本稿では、これらの事象を『源氏小鏡』諸本の記述と比較し、精査検証しながら、『源氏小鏡』第一系統（古本系）第一類京都大学本系統が「源氏千種香」の依拠本である可能性を探りたいと考える。もしも『源氏小鏡』が「源氏千種香」の典拠として機能したとすれば、それは香という知的遊戯世界での『源氏小鏡』の享受であり、梗概書が源氏文化の世俗化への一役を担った例証といえるのではないだろうか。

キーワード：源氏千種香 源氏小鏡 梗概書 連歌 組香

はじめに

## 第一章

一 『香道蘭之園』の概要と成立

二 「源氏千種香」の概要

## 第二章

一 巻順のこと

二 「筍木香」証歌のこと

三 「玉葛香」衣配りのこと

四 「梅枝香」薫物合のこと

五 「若菜香下」女楽のこと

まとめ——「源氏千種香」と『源氏小鏡』諸本の関係の整理——

## はじめに

「源氏千種香」は、元文年間に成立したと考えられる香の伝書『香道蘭之園』<sup>(1)</sup>の八・九巻に掲載されている組香（資料2の1）で、『源氏物語』五十四帖のうち「桐壺」「夢浮橋」を除いた五十二帖を題材としている。この「源氏千種香」は、他の香の伝書や組香集には見られない珍しい組香である。

香における源氏文化と言え、その意匠「源氏香之図」が独り歩きして知られるところとなった「源氏香」が有名で、香会でもよく行われるが、「源氏千種香」の興行はあまり聞かない。筆者は香会で実際にその組香を体験した時、物語の内容とは関連を持たない「源氏香」よりも、はるかに原典の『源氏物語』と深く関わった組香であることを知った。しかし、個々の組香を精査してみると、原典の『源氏物語』と明らかに異なる事

象があることに気づいた。例えば、物語には見られない和歌が証歌（資料2の2）となっていたり、物語にはない言葉が聞きの名目（資料2の4）に使われていたり、巻の順序が違っていたり、重要な場面での登場人物に欠落があったりと、必ずしも忠実な物語の再現が行われてはいないのである。

ではなぜこのような現象が起きたのであるが、組香における物語内容の改編には、何らかの根拠となるものが存在したのではないかと考えた。香道の歴史を顧みると、その創成に、連歌師や連歌に嗜みの深い人物が多く関わったこと<sup>(2)</sup>に気づく。一方連歌の隆盛にともない、『源氏物語』の言葉（源氏寄合）を用いた句が数多く詠まれ、その教則本として『源氏物語』の梗概書が機能したことから、「源氏千種香」も原典『源氏物語』を直接の典拠としたのではなく、いずれかの梗概書を経て考案されたものではないかと推測した。

そこで、まず巻順の異同を手がかりに各種の梗概書を調査したところ、中世から近世にかけて最も流布したといわれる『源氏小鏡』（以下『小鏡』とも略称）のそれとほぼ同じであることに気づいた。さらに『源氏小鏡』の第一系統（古本系）第一類京都大学本（伝持明院基春筆。以下古本系京都大学本と略称）<sup>(3)</sup>の記述に、「筍木香」の証歌や、「玉葛香」「梅枝香」「若菜香下」などの組香内容との共通点が見出された。本稿では、「源氏千種香」における『小鏡』受容の一面を指摘し、『小鏡』の諸本と比較しつつ、中でも古本系京都大学本系統が「源氏千種香」の依拠本である可能性を探りたい。

まず第一章で、『香道蘭之園』の成立の経緯と「源氏千種香」の概要を述べ、第二章では巻順および「筍木香」「玉葛香」「梅枝香」「若菜香下」の内容と『源氏物語』原典との相違を検証した上で『小鏡』との関連を提示し、「源氏千種香」における『源氏小鏡』享受の様相の一端を明らかにしたい。

なお、本稿では宮内庁書陵部所蔵御所本『香道蘭之園』（一六三八五）を底本とし<sup>(4)</sup>、『源氏小鏡』については岩坪健氏による『源氏小鏡』諸本集成<sup>(5)</sup>を用いた。また、『源氏物語』本文の引用は『新編日本古典文学全集 源氏物語』に拠る。なお香道の専門用語については、既出の分を含め、資料2を参照されたい。

## 第一章

### 一 『香道蘭之園』の概要と成立

まず『香道蘭之園』の概要と、その成立の経緯について紹介しよう。享保・元文の頃、数々の香伝書が京都・大坂で成立した<sup>(6)</sup>中、『香道蘭之園』は菊岡沾涼により江戸で取りまとめられた、香道の古法の集大成である。本書の中心は組香の集成であるが、室町時代以来の香道の歴史、組香以前の炷継（資料2の5）、空炷（資料2の6）の香についても忠実に伝承している。

「香の伝来」「香の矩模」「十炷香の法」「香の拵え方」といった香道の基礎知識からなる一巻にはじまり、二～九巻および附録巻に二・三六の組香が掲載されており、そのうち八・九巻が「源氏千種香上・下」である。組香の主題となる和歌や物語の言葉を証歌、証詞（資料2の2・3）として用い、ときには人形などの立物を使った盤物（資料2の8）というゲーム（組香）も登場している。十巻においては香道具の詳細な図示と解説がなされ、また「名香目録」「名香古歌古詩」「薫香名目」「薫香薬種製法」などが掲載されている。

ここで一巻の「十炷香の本原」の最終部分で語られる本書成立の経緯（資料1傍線部）を要約してみる。

正保・慶安（一六四四～一六五二）の頃、京都に住み堂上方<sup>どうじょう</sup>に出入りして、様々な組香を伝授し、香道の達人と世に知られていた鈴鹿

周斎<sup>(7)</sup>は、延宝（一六七三～一六八一）の初め江戸に下ってきた。また香に熟達し、公卿に仕えていた衣山鞠負丞宗秀<sup>(8)</sup>も、職を辞して江戸に下り、周斎の世話でその近所に住いを設けた。この二人から香道の伝授を受けたのが山下弘永<sup>(9)</sup>で、弘永から栗本穩置<sup>(10)</sup>と弘永の子息・一学に香の奥義は伝わったのである。

十巻末の奥書には次のようにある（〔A〕から〔F〕の記号を付す）。

延宝五丁巳春自鈴鹿周斎授之

山下弘永〔A〕

宝永七庚寅八月自弘永授之

栗本穩置〔B〕

斯書原本一時之艸稿而前後錯雜  
穩置患之菊岡房行加力精訂旧稿  
始斯書大成名曰蘭園

〔C〕

享保十八壬丑八月上旬自穩置授之

菊岡寄邦〔D〕

元文四巳未九月下旬自寄邦授之

中村昌平〔E〕

皆元文四未炷向東窓菊岡崔下菴沾涼書之

〔F〕

〔A〕〔B〕にはそれぞれ、延宝五（一六七七）年鈴鹿周斎から山下弘永へ、宝永七（一七一〇）年山下弘永から栗本穩置への、詳しい伝授の年月が記されている。

周斎が、香道家として生活を営むことを期して江戸に下ったとすると、香道がその頃江戸において定着し、それを享受する人口があったと考えざるべきであろう。山下弘永について詳細は解らないが、栗本穩置については奥書〔C〕の部分から、周斎より伝授されたことをまとめた「一時之艸稿」の「錯雑」を穩置が思い、菊岡房行（沾涼）の力を借りて旧原稿を精訂し、『蘭園』と名付けた経緯が理解できる。

つづいて〔D〕の奥書があるが、享保十八（一七三三）年に穩置より伝授された菊岡寄邦（晴行）は、沾涼（房行）の兄である。

さらに、〔E〕には元文四（一七三九）年に中村昌平（不明）が菊岡寄邦から授けられたこと、〔F〕には元文四年に菊岡沾涼が書写したことが記されている。〔E〕は〔F〕の前にあるが、〔F〕が秋なのに対し九月下旬であり、〔F〕より後の記入かもしれない。ただし、中村昌平については不明である<sup>(11)</sup>。

〔C〕と〔F〕に見える菊岡沾涼<sup>(12)</sup>は、延宝八（一六八〇）年七月に生まれ、延享四（一七四七）年十月に六十八歳で亡くなっている。伊賀上野の人で、はじめ飯束氏を名乗ったが、のちに母方の実家菊岡家に養子に出され、名を房行とした。その後、養父菊岡行尚に実子が誕生したため、自ら望んで江戸へ出て神田に居を定め、売薬（一説には経師）を家業とした。俳諧を内藤露沾<sup>(13)</sup>に学び、俳諧師として活動するかたわら、和漢の学に通じ、『江戸砂子』のような江戸時代を代表する江戸の地誌をはじめ、考証的な著作など二十余冊を書き残しており、多方面で活躍した知識人であったようだ。従って栗本穩置にその編集能力を買われたのであろう<sup>(14)</sup>。

この奥書の記述から、十七世紀後半に京都から江戸に香道が流れてきた経緯が読み取れる。また本来堂上のものであった香道が、江戸で売薬（あるいは経師）を生業とした菊岡沾涼により取りまとめられたことは、当時の身分制度でいう「工商」にあたる階層、地下<sup>じげ</sup>へと香の文化が流れ

た一つの記録と言えるのではなからうか。

また香道流派という視点から見ると、鈴鹿周斎は堂上に出入りしていた香人であるので、「御家流」<sup>(15)</sup>の人である。「御家流」は、三条西実隆、烏丸光広、油小路隆基、猿島家胤、大口含翠と相伝し、含翠に伝わった頃に堂上から地下に移り、それまで公家の間では「当流」と呼んでいたのを、含翠以降の流れを「御家流」と称するようになったと言われる。本書に見られる、鈴鹿周斎からの系譜は、関東に分派した「御家流」と考えられよう。

さらに奥書から、伝承の方式<sup>(16)</sup>が「完全相伝」形式であることが解る。雅楽や能楽のように世襲の家芸の家では「一子相伝」が貫徹されてきたが、茶の湯、立花、香道など、遊芸というジャンルに括られるものの多くは、当初「完全相伝」の形式をとっていた。

本書の成立に関して、鈴鹿周斎の伝える所を栗本穩置の意を汲んで整理し、『蘭之園』という書名を付けたのは沾涼であるが、彼一人の著作ではなく、何代かにわたって書き継がれたものと察せられる。しかし相伝を受けられる者だけにこうした書を授けるので、ごく限られた人たちの間で受容されたものと言え、それゆえ『香道蘭之園』も香道のテキストとして広く普及したものではなかったと考えられよう。

なお本書は御家流の伝書ではある<sup>(17)</sup>が、他流の組香をその流派名とともに紹介してもいて、自流のみにこだわる偏狭な流派意識はあまり感じられない。いずれにしても京都・大坂が香道の主流であった時代に、『香道蘭之園』が江戸で取りまとめられた香伝書であること、さらに、「源氏千種香」が本書にしか見られない組香であることが注目に値すると言えよう。

## 二 「源氏千種香」の概要

「源氏千種香」は、『源氏物語』五十四帖のうち「桐壺」「夢浮橋」を



除いた五十二帖を題材とした組香である<sup>(18)</sup>。「桐壺」「夢浮橋」に対応する組香がない点については、「源氏香」と同じである。

「源氏香」は香五種を各々五包用意し、その二十五包のうち任意の五包を炷<sup>た</sup>く。五炷を五本の縦線であらわし、その内同じ香があれば、線の頭を横線で結ぶ。よって回答の可能性が五十二となり、この数から源氏五十四帖を連想し、その初巻と最終巻を除き、各巻に図柄をあてはめたのが「源氏香之図」である。その図柄の面白さがもてはやされ、源氏意匠として絵画や工芸の世界に寄与したと言えようが、「源氏香」は物語の内容との関連性を持つものではない。

一方「源氏千種香」は、物語の巻々の場面を捉え、証歌や証詞を用いたり、あるいは盤物に仕立てて、香の聞きにしたがい人形に物語に因んだ所作<sup>(19)</sup>をさせたりと、組香の仕組みに物語を取り入れて、香りを聞き当てながら、物語をより深く楽しめるように考えられた組香である。

「源氏千種香」のうち、盤物は十三で、女楽（若菜香下）や五節の舞姫（乙女香）、絵合（絵合香）、薫物合（梅枝香）、春秋の争い（胡蝶香）や鷹狩り（御幸香）など王朝風俗が展開する場面や、車争い（葵香）、住吉詣（漂漚香）、石山詣（関屋香）、蹴鞠での垣間見（若菜香上）、宇治の姫君との邂逅（橋姫香）といった、物語の転換点に主題を求めている。いわゆる宇治十帖の初めの巻「橋姫香」を最後に盤物は登場しない。これとは逆に、物語後半の組香では証歌が多く用いられ、その場面の情趣や、登場人物の心情描写に機能しているものもある。また香組において、聞捨（資料2の15）や捨香（資料2の16）といったルール（規則）を使って、登場人物の死や離別、不在などの喪失感を演出<sup>(20)</sup>しているものもある。

では第二章で、巻順と、「簾木香」「玉葛香」「梅枝香」「若菜香下」の組香内容を精査し、『源氏物語』原典との相違を押さえながら、『源氏小鏡』諸本との関連をみてみよう。

## 第二章

### 一 巻順のこと

現行の『源氏物語』では、「蓬生」「関屋」の順であるが、「源氏千種香」では「関屋香」「蓬生香」の順であり、同じく現行の「紅梅」「竹河」も、「竹川香」「紅梅香」の順になっている。注5前掲書所載の『小鏡』諸本では、これらの巻の順序は次のようになっている。

#### 第一系統（古本系）

第一類 京都大学本（伝持明院基春筆）

せきや・よもきふ たけかは・紅梅

第二類 宮内庁書陵部本

せき屋・よもきふ たけ川・こうはい

#### 第二系統（改訂本系）

神戸親和女子大学本（無刊記整版）

関屋・蓬生 竹川・紅梅

#### 第三系統（増補本系）

第二類 都立中央図書館本（三井寺聖護院系統）

よもきふ・関屋 竹河・紅梅

国文学研究資料館本（道安系統） 関屋・蓬生 竹川・紅梅

第三類 天理図書館本 せきや・よもきふ<sup>\*1</sup> たけかは・こうはい

#### 第四系統（簡略本系）

神宮文庫本 関屋・よもきふ 竹川・紅梅

大阪市立大学本 せきや・よもきふ 竹川・こうはい

#### 第五系統（梗概中心本系）

天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

（せきや）よもきふ<sup>\*2</sup> 竹かは・こうはい

京都大学本（飛鳥井重雅筆）よもきふ・関屋 紅梅・竹川

天理図書館本（連蔵筆）

せきや<sup>\*3</sup>

## 第六系統（和歌中心本系）

京都大学本

蓬生・関屋 竹川・紅梅

\*1 「せきや」「よもきふ」の順であるが、「せきや<sup>せきやのまへ</sup>」「よもきふ<sup>の次也</sup>」と割注付き。

\*2 目次には「十一、みをつくし<sup>ならひ、せき</sup>」とあり、本文に「ならひ、よもきふ」とあるが、「せき屋」の本文はない。

\*3 「一、せきやのまきと云事。・・・」の次は「一、うすくものうゐんは、・・・」と続き、「よもきふ」は見当たらない。

「関屋」「蓬生」の巻順については、第三系統第二類都立中央図書館本、第五系統京都大学本、第六系統京都大学本が「蓬生」「関屋」となっており、「竹河」「紅梅」については、第五系統京都大学本だけが「紅梅」「竹川」となっていた<sup>(2)</sup>。「源氏千種香」は、「関屋香」「蓬生香」「竹川香」「紅梅香」の順であることから、この順番で書かれた『源氏小鏡』を使った可能性があると考えられる。

なおここに見られる巻順の揺れに関して、古本系第一類京都大学本の「紅梅」の本文末（注5前掲書、六三頁）に、

又、かほる中しやうのならひ、こうはい、たけかわともいへり。又たけかわを、まついふ事あり。おなしことなれば、いたくあんす<sup>案</sup>へからす。

という文章がある。

また、稲賀敬二氏は「五十四帖成立異聞」<sup>(22)</sup> 二二二頁で、

蓬生・関屋の順と、関屋・蓬生の順と、どちらの読み方を探るかは、平安時代の末頃、すでに二つの立場が併存していた。いずれも末摘花・空蟬という女性の後日譚を扱うエピソードで一巻をなしている。それを長編の流れのどこへ位置づけるか、古来問題が多かったようである。

と記されており、参考となる。

## 二 「簾木香」証歌のこと

まず「源氏千種香」の「簾木香」の内容を見てみよう。（傍線部は筆者による）

簾木 三包。試みあり。 園原 伏屋 <sup>三包つゝ。試みなし。</sup>

此の九包打合、三結にして三炷開き也。三度にきく。

三炷の内、簾木はかりをきゝて、園原、伏屋はき、捨也。三炷の内、

簾木一炷あれば木の札、但、<sup>外二炷は前後かまはず。</sup>

簾木二炷ある時は木の札、三炷共に簾木の時は森の札。三炷の内

に簾木なくは木陰の札也。又、<sup>三炷くにて小記録にも書も有</sup>

二炷有時 林 名 <sup>(ママ)</sup>

その原や伏屋におふる名のうきにあるにもあらずきゆるは、き、

「簾木香」では、証歌に因んだ簾木・園原・伏屋と名付けた香木三種を用いる。本香（ゲーム本戦）開始前に簾木の試（資料2の13）があるので、簾木は計四包の用意が必要である。本香では、簾木・園原・伏屋を三包ずつ用意し、この九包を打ちまぜた後、三包ずつ三組にわけ、それを一組ずつ聞いていく。三包聞いたら、その中に試で聞いて覚えてお

いた香り、箒木があるかどうかを考えて、札を打つ（資料2の17）。三包の内に箒木が一つあったら「木」の札を、二つなら「林」の札を、三つとも箒木だったなら「森」の札を出し、一つも箒木がなかったら、「木陰」の札を出す。そしてこれを三度繰り返すというルールである。園原や伏屋が出て答えない聞き捨てである。

さて、ここで証歌となっている和歌は『源氏物語』諸本や諸注釈書には見当たらない歌であり、『源氏物語』諸本での空蟬の歌、

数ならぬ伏屋におふる名のうさにあるにもあらずきゆるは、き、

とは第一句が異なり、第三句も一部分が異なっている。では『小鏡』諸本ではどうか。

第一系統（古本系）第一類 京都大学本（伝持明院基春筆）

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるは、き、

第一系統（古本系）第二類 宮内庁書陵部本

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるは、き、

第一系統（古本系）第四類 国会図書館本

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるは、き、

第二系統（改訂本系）神戸親和女子大学本

かすならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるは、き、

第三系統（増補本系）第二類 都立中央図書館本

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるは、き、

第三系統第二類 国文学研究資料館本

その原やふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるは、き、

第三系統第三類 天理図書館本

其原やふせやにおふる名のうさに有にもあらず消るは、き、

第四系統（簡略本系）神宮文庫本

その色やふせやに生る名のうさにあるにもあらずきゆる<sup>(マ)</sup>箒木

第四系統 大阪市立大学本

其はらやふせやにおふる名のうさ<sup>(マ)</sup>に有にもあらず消るは、き、

第五系統（梗概中心本系）天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるは、き、

第五系統 京都大学本（飛鳥井重雅筆）この歌の記載なし

第五系統 天理図書館本（連藏筆）

そのはらやふせやにおふる名のうさにあるにもあらず<sup>(マ)</sup>きゆるは、き、

第六系統（和歌中心本系）京都大学本 この歌の記載なし

という結果であった。

なおこの歌の記載のない第五系統京都大学本では、

は、木、の心もしらて其原のみちに<sup>(マ)</sup>あやなしまとひける哉

同じく第六系統京都大学本では、

は、き、の心をしらてその原の道にあやなくまとひつる哉

の歌が載せられている。この歌は、空蟬の「数ならぬ」の歌の直前にある源氏の歌であり、いわゆる青表紙本での「箒木の心をしらでその原の道にあやなくまどひぬるかな」とは、助詞や助動詞が微妙に異なる部分がある。

伊井春樹氏は、『源氏小鏡』での第一句「そのはらや」について（注3前掲書、八〇四頁）、

異文発生の原因としては、古註釈書で指摘する本歌との関連が考えられる。『紫明抄』を例にすると、「かすならぬふせやにおふる云々」の歌の注記として、

そのはらやふせやにおふるは、木々のありとは見れどあはぬ君かな  
源重之

しなの、くに、そのはらやふせやといふ所にあるなり、は、

きゞに両説あり、(以下略)

と説明する。これを見てすぐに、「そのはらやふせやにおふる」までの上句が、『小鏡』の引用歌とまったく一致しているのに気がつくだろう。作者は所持した物語本文の行間に、典拠とした歌を古注などから書き込んでいたのであり、ダイジェスト化する際目移りなどにより、それに引きずられて新たな異文を作り出してしまったと考えるのが妥当ではないか。そのような異文を持つ伝本がかつて存在したとするよりも、合理的な解釈だと思う。

と論ぜられている。

「簾木香」考案者が、何の根拠もなく、『源氏物語』と異なる「その原や伏屋におふる名のうきにあるにもあらずきゆるは、き、」を証歌に用いたとは考えにくく、考案の際に、「そのはらやふせやにおふる」ではじまる『源氏小鏡』のテキストを用いたものと推測される<sup>(23)</sup>。

### 三 「玉葛香」衣配りのこと

「玉葛香」は、年の暮れに源氏が紫の上とともに、女性たちの正月用の晴着をととのえ、それぞれの年齢や容貌、性格にふさわしい衣装を見立てて配る、衣配りの場面を組香にしている。玉鬘巻(一三五―一三六頁)では、

紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとはかの御料、桜の細長に、艶やかなる搔練とり添へては姫君の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれどにほひやかならぬに、いと濃き搔練具して夏の御方に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対に奉れたまふを、上は見ぬようにて思しあはす。

―中略―

かの末摘花の御料に、柳の織物、よしある唐草を乱れ織るも、いとなまめきたれば、人知れずほは笑まれたまふ。梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に濃きが艶やかなる重ねて、明石の御方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にある梔子の御衣、聴色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。

というように、衣装の色だけでなく、紋様や織、襲ねについてまで言及している。

では、「玉葛香」について見てみよう。(傍線部は筆者による)

一赤 二紅梅 三紅井 四白 五縹 六柳 七梔 各一包つ、皆試あり。

ウ色 七包。試なし。

右は色の七包に、赤、紅梅等の七包を一包つ、結び合、二炷き、也。二炷の始に色と出るは、みな衣配りの札を打也。

但、衣配の伝授ハ四つの色に打やうあり。

伝授なき人ハ只きぬ配りの札を打へし。

赤ト色	紫のうへ	紅梅ト色	むめ壺
白ト色	明石のうへ	縹ト色	花ちる里
柳ト色	末つむ花	梔ト色	うつせみ
紅井ト色	玉かつらの内侍		
色ト何	皆衣配り也		

札の銘 表は常の紋なり。

紫 梅 明 花 末 蟬 玉 七枚<sup>(十)</sup>つ、都合七十枚。



外に今やう　ゆるし　かとり　おちちくり<sup>(ママ)</sup>　各七枚つ、  
都合二十八枚。

但、此四色の札は打やうの習ひあり。

本戦(ゲーム)では、赤・紅梅・紅井・白・縹・柳・梔と名付けた香木七種一包ずつ(試があるので二包ずつ用意)と、色と名付けた香木一種七包を、赤と色、紅梅と色、紅井と色というように結び合せ、その二包を打ちまぜてから炷いていく。二炷の始めに色が出たら、「衣配り」という札で答え、例えば赤と色、紅梅と色、あるいは白と色という順序で香が出たら、指示通りの聞きの名目(答えのことば)、紫の上、梅壺、あるいは明石の上に准じて、それぞれ「紫」「梅」「明」の札で答える。香会の連衆は十人制が基本(資料2の補足)なので、札数が多くなる。「今やう・ゆるし・かとり・おちくり」の四種の札の打ち方は習いであるとされていて、伝授事であるため、今となってはどのようなものなのか不明である。

いずれにしても、ここでの衣配りは、人物と衣装の色の組合せだけで、物語よりも簡素化されている。加えて、物語では紫の上に当てられている紅梅が梅壺(物語のこの場面には登場しない)に配され、紫の上には赤が配されており、また「曇りなく赤きに、山吹の花の細長」を配られた玉鬘に「紅井」が当てられているように、物語の記述とは相違がある。では『小鏡』では、どのような記述がされているだろうか。古本系京都大学本を引いてみよう(注5前掲書、三八―三九頁)。

しはすのすゑに、源氏の御かたより、御かた<sup>(装束)</sup>の正月のさうそく、くはらせたまふ。まつ、むらさきのうへ、あか色。御むすめのひめきみの御かたへ、こ<sup>(紅梅)</sup>うはい。またかつらの御かたへ、くれなる。あかしの御かたへ、しろき。はなちるさとへ、は<sup>(標)</sup>なた。すゑつむへ、

やなき。うつせみのあまのもとへ、くちなし色。これを、「きぬくはり」といふ。心へへし。

―中略―

きぬの事いはんには、「玉かつら」「くれなる色ふかく」などいふ事をは、事によりてつけへし。このまきならず、きぬの色に、「かとり」「ゆるし色」「いまやう色」などいふ事あり。けしからず、<sup>(秘事)</sup>ひしと申ならはしたり。「かとり」とは、みついろのす、<sup>(生絹)</sup>しなり。かちやうのことなれば、「かとり」といふ。「いまやう色」とは、こ<sup>(花鳥)</sup>うはいを、はる<sup>(春)</sup>いふなり。「ゆるしいろ」とは、こ<sup>(練貫)</sup>うはいを、くれなるよりは、ちと、うすけれど、ゆるすといふなり。「ねりぬき」は、いみしく<sup>(華飾)</sup>くわしよくのものなるを、ゆるすといへり。「おちくる色」と、いふ事あり。これ又ひし<sup>(秘事)</sup>といふ。こきくれなるの事なり。

両者を比較すると、人物と色の組合せは、「御むすめのひめきみの御かたへ、こ<sup>(紅梅)</sup>うはい」以外、すべて一致している。特に物語と「玉葛香」で相違していた、紫の上―赤、玉鬘―紅、という組合せが「玉葛香」と共通していることは注目される。

なお「玉葛香」での「むめ壺」が、梅壺女御(もとの斎宮の女御)＝後の秋好中宮ならば、すでに宮中の方(「絵合」巻で冷泉帝に入内)なので、衣配りの対象外である。ここでは「むめ壺」ではなく、明石の姫君でなければならぬ。後述するように、女樂が主題の「若菜香下」(盤物)においても、明石の女御(衣配りでの明石の姫君)であるべき位置に、「梅壺人形」が登場している。「源氏千種香」で、明石の姫君または後の明石の女御が登場する組香は「玉葛香」と「若菜香下」だけであるが、どちらにおいても「むめ壺」と誤ってしまったのであろうか。この点は問題として残るものの、しかし「玉葛香」と『小鏡』の密接な関連性は明らかであろう。

また「今やう・ゆるし・かとり・おちくり」の札（そのうち「かとり」「おちくり」は玉鬘巻の原文にはない）が「玉鬘香」で用いられることについても、『小鏡』が「かとり」「今やう色」「ゆるし色」や「おちくる色」を特に取り上げて解説していること<sup>(25)</sup>の影響と見てよいのではないのか。これらの札打ちが「習ひ」とされて、詳らかに記されていないのも、『小鏡』の「ひしと申ならはしたり」の記述が反映して秘伝となった可能性もあろう。

なお古本系京都大学本以外の諸本での「衣配り」の記述は、色が違うものや、明石の御方が登場しないものもあり様々であるが、第三系統第二類国文学研究資料館本、第四系統大阪市立大学本、第五系統京都大学本は、第一系統京都大学本と全く同じである。資料3を参照されたい。

#### 四 「梅枝香」薫物合のこと

「梅枝香」は、盤物仕立てであり、<sup>(たきもの)</sup>炷物を持った人形が登場する華やかな組香である。薫物合が主題の「梅枝香」は、香遊びである「源氏千種香」にとって、とても重要な組香と言えよう。しかし、「梅枝香」には大切な登場人物である朝顔の前斎院が登場しないこと、さらに、薫衣香調合の明石の御方が黒方という取り合せになっていること、この二点が不審であるとして問題視されてきた。

では、「梅枝香」について見てみよう。（傍線部は筆者による）（図版1）

一	二	三	三包つゝ。試あり。	ウ	三包。試なし。
此十二包打合、一炷開也。二人つゝ五組にわかる。					
たき物合の相手					
源氏の人形	上童 <sup>わらは</sup> の人形	一	炷物を持	銘はじ、う	
紫上の人形	同一	同	同	〃梅花	
明石上の人形	同一	同	同	〃黒方	

花散里の人形 同一  
兵部卿の人形 同一  
書物を持 〃荷葉  
批判

盤の目二十間 みそ五筋

はしめ名の人形と上童の人形、それ／＼の組と向合て立ル也。両人乗にすゝみて、名の人形と上童と一ところへはやくよるを一の勝とす。たとへは一組両方ともに十をきけは、十間目にて行合也。是則一の勝也。たき物を合せたるといふ心にて、人形ハ向合て一所に立置。其後香ハきゝて記録には記し、人形ハうこかぬ也。又、一方あたりつよく十五間行、一方五間ならて行され共、十五間目にて両方行合也。これもおなしく勝なり。一二の勝すめは、香は残りたるも、それかきりにて盤のせうふは終る也。

但、<sup>(批判の組は各別なれば、一二の勝に成りたる共、其時は三までのせうふあるへし。)</sup>

三炷のつゝけきゝは五間すゝむ。点はやはり三点。ウのあたりは多少かまはず二間すゝむ。点も二点。

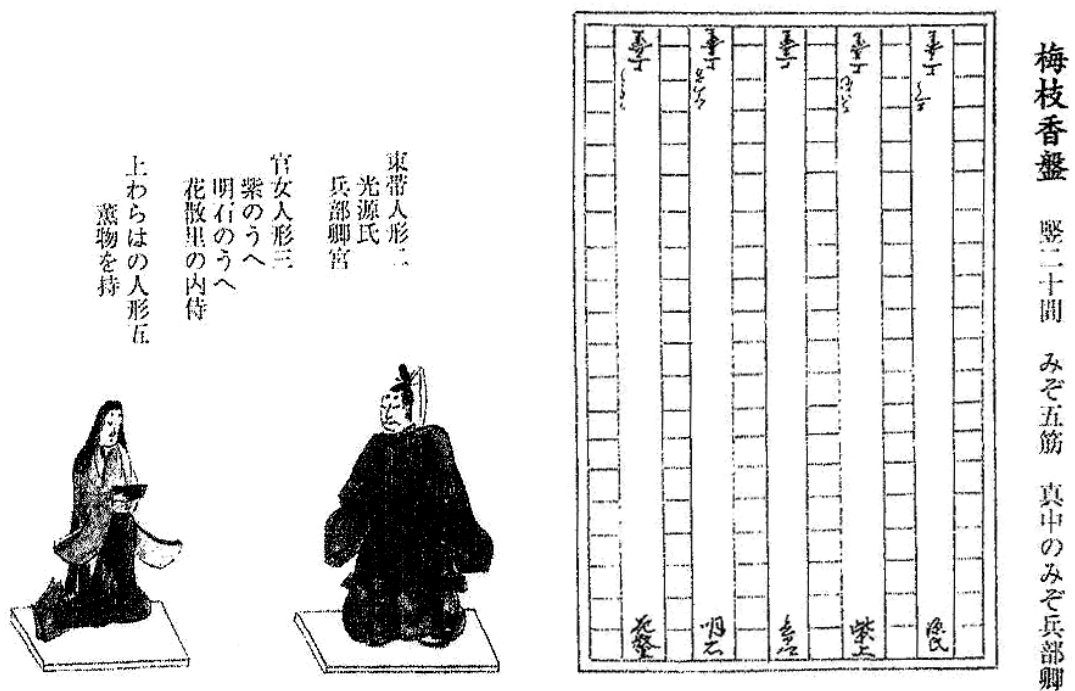
其外、一人きゝ二人きゝの差別なし。

五組の人形に聞き手が二人ずつついて、香を聞き当てていく。「一炷開」（資料2の10）とあるのは、香を一炷開いたら、すぐに答え合せをすることである。「薫物を合せる」の心から、盤の両端に、名の人形（源氏（兵部卿の五つ）と童人形を向かい合せに立て置いて、香の当否にしたがい、盤の上を歩ませ、早く行き合うことを勝としている。

物語では、源氏より薫物の調合を依頼された朝顔の前斎院から、黒方と梅花が届く。源氏は黒方と侍従、紫の上は黒方・侍従・梅花、花散里は荷葉を一種、そして明石の御方は薫衣香を調合する。二月十日の夕暮れに兵部卿官を判者にしての薫物合が行われ、朝顔の前斎院の黒方、源氏の侍従、紫の上の梅花、花散里の荷葉、明石の御方の薫衣香が炷かれる。

梅枝香之記

本	源氏	桐	松	竹	梅	花	香
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
一	一	一	一	一	一	一	一
三	三	三	三	三	三	三	三
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
一	一	一	一	一	一	一	一
三	三	三	三	三	三	三	三
二	二	二	二	二	二	二	二
九	七	五	八				



図版1 梅枝香 香之記および盤立物図 尾崎左永子・薫遊舎校注『香道蘭之園』、347・349 頁より

「梅枝香」では、物語と異なり朝顔の前斎院の人形は登場せず、また明石上の人形と向かい合う童人形は、薫衣香ではなく黒方を持つている。それでは『小鏡』での、薫物合の場面はどのように記述されているだろうか。古本系京都大学本は次の通りである（注5前掲書、四五頁）。

やかてその夜、かの（堂兵部卿）はたるひやうふきやうのみやは（判者）はんしやにて、御かた（梅花方）のたきものを、心みさせたまふ。たき物のいろに、はい花ほう、むらさきのうへ、あはせたまふ。（黒方）くろほう、あかしのうへ、あはせ給ふ。（前巻）かゑうのほう、花ちるさと。（侍従）し、う、源氏あはせ給ふ。いづれも、とりくにおもしろし。中にも、はいくわは、そのころのおりにあひて、おもしろしと、さためられき。

右のようになっていて、「梅枝香」での人物と薫物の組合せと符合しており、朝顔の前斎院が見えないことも共通する。但し、当該本の「むめかえ」の冒頭（注5前掲書、四四～四五頁）は次のような記述である。

このまき、梅かえといふ事、正月つこもりころ、源氏のおと（大臣）、の六てういんにて、たき物あはせあり。是は、あかしのうへの御はらの御むすめ、はるみやにまいりたまふ御いそきなり。（香）かうとも、おんかたくへくはりて、いとみあわせたまふ。（前斎院）せんさいゐんと申は、かのあさかほのさいゐん、源氏に心つよくて、やみし人なり。この御かたより、ちりすきたるむめのえたに、おん文つけて、こんるりのつほに、たき物いれて、五はのえたにつけ、しろきつほにも、たき物いれて、むめを（御）ゑりて、つけられたり。むすひつけたるいとどさま、なよひかに、えならず、おもしろく（しなされたり）しなされたり。そのうたに、52花のかはちりにしえたにとまらねとうつらん袖にあさくしまめや

と、ありしなり。「たきもの」といふ事には、

五はのまつ。つけられし文。

など、いふへし。

ちりすきたる梅のえた。（ママ）（巻）なよひかないと。るりのつほ。

など、あるへし。

ここでは、朝顔の前斎院から薫物二種が届けられており、物語に忠実である。さらに「たきもの」といふ事には」として、届けられた薫物の容器や飾りの描写を踏まえた寄合の詞も提示している。それなのに、なぜか薫物合の場面では、朝顔の前斎院は排除されてしまったのである。

薫物とは、中国からその調合法が伝えられ、沈木を主成分とし、植物性・動物性の香料を粉末にしたものや、保存のための甲香（貝香）を加え、蜜や梅肉で練り合わせて好みの匂いにする練香のことである。香料の調合具合によりそれぞれ名付けられた「梅花」「荷葉（蓮）」「菊花」「落葉」「侍従」「黒方」は、（むくき）「六種の薫物」と称され有名である。薫物の処方『薫集類抄』（巻）に詳しい。

物語では明石の御方が六条院の戌亥の冬の町の町に定めおかれていたのかで、「梅枝香」では、冬の薫物の黒方を童人形に所持させているのか、と香の実技の場では考えられてきた<sup>27)</sup>。しかし、物語では『薫集類抄』に登場する合せ香の名手、朱雀院、公忠朝臣の名を挙げて、「百歩の方」など思ひえて、世に似ずなまめかしさをとり集めたる<sup>28)</sup>（四〇九頁）薫衣香を、明石の御方に調合させている。また源氏には仁明天皇によって禁制とされた「承和の御いましめの二つの方」（四〇四頁）である侍従と黒方を調合させ、紫の上にも「八条の式部卿（本康親王）の御方」（四〇四頁）で黒方・侍従・梅花を調合させている。この事実上の仁明天皇、朱雀院、八条宮、公忠朝臣と受け継がれた薫物の系譜<sup>29)</sup>をないがしろにしての、「梅枝香」での人物と薫物との組合せは、甚だ合点のいかぬことであった。しかし明石の上に黒方を当てることと、朝顔の前斎院が登



場しないことの一致を踏まえると、『小鏡』を典拠として「梅枝香」を考案したのではないかと推測される。

なお、第一系統京都大学本以外の諸本での「薫物合」は、他の古本系二本と第三系統都立中央図書館本、第四系統神宮文庫本、第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）も京都大学本と同様であるが、第二系統（改訂本系）神戸親和女子大学本では明石の御方が薫衣香となり（第三系統国文学研究資料館本・天理図書館本も）、また朝顔の前斎院は黒方となって薫物合の場面に登場し（国文学研究資料館本も）、誤りが正されている（資料4）。このことについては、伊井春樹氏が（注3前掲書、八五〇頁）、

これは改訂本系の方が正しいのであって、また古本系で脱落していた権斎院を加えているのは、歌の異文を訂正したと同じように、梗概本文においてもその改訂に際しては、青表紙本を詳細に見ていって誤りを正していったと考えられる。

と記されている。

ところでこの『小鏡』『むめかえ』本文末（注5前掲書、四五頁）に、興味深い部分がある。

又たきものに、<sup>（百歩）</sup>「も、あゆみ」といふ事あらは、なにそと、おもふへからず。これは、とをくまて、にほふ心ねなり。たきもの、<sup>（名）</sup>なにては候はす。又たきものを、<sup>（夏冬）</sup>みきはにうつむといふ事あるへし。たき物あはせは、<sup>（夏冬）</sup>なつふゆかはりて、うつむ事あり。それもくにし<sup>（句）</sup>たかひて、つけへし。わたとの、したより、いつるみつに、うつむ。<sup>（御清水）</sup>御かわみつになすらへて、なといふ事もあるへし。くはしくは、むめかえのまきにあるへし。いつくまでも、むめたき物は<sup>（麻花）</sup>はいくわなれは、むめかえといふなり。

ここでは、まず「百歩の香」について説明し、さらに練り合わせた薫物を水のほとりに埋め、熟成させるという方法についても言及している。物語でも源氏は、薫物合の直前に、西の渡殿の下から流れている遣水の汀近くに埋めさせておいた二種の薫物を、惟光の宰相の子の兵衛尉に取り出させている。この『小鏡』の作者は、「くはしくは、むめかえのまきにあるへし。」としながらも、「たき物あはせは、なつふゆかはりて、うつむ事あり。」として、物語からだけでは知り得ない薫物作りに関する知識を示している。

『薫集類抄 下』『埋日数。<sup>付埋所。</sup>』（注26前掲書、五五一頁）の項には、諸家の処方が掲げられているが、先に紹介した公忠朝臣の処方を挙げるなら、

黒方。侍従。春秋五日。夏三日。冬七日。埋之梅樹下。

と記されている。『小鏡』作者は、季節による薫物調合方法の違いを知っていたのである。

伊井春樹氏は、『小鏡』の作者について（注3前掲書、八二七～八二八頁）、

南北朝期において連歌に精通し、しかも河内家の源氏学を継承した人物が『小鏡』の作者だったと考えられるが、私は今のところ二条良基を想定している。

と記しておられる。想定通りならば、薫物の知識を有していて当然であると考えられる。

## 五 「若菜香下」女楽のこと

「若菜香下」も盤物仕立てであり、女楽の華やかな場面を組香にしている。四人の女君たちの奏でる四つの楽器、そして女君たちの容姿を喻

えた花木、それぞれが他に置き換えられない組合せである。ここでの問題点は、唱歌した人物である。では「若菜香下」を見てみよう。（傍線部は筆者による）（図版2）

一 二 三 三包つ。試あり。 ウ 三包。試なし。

此十二包打合、一炷開き也。

女楽 人形一ツに二人組也。

女三宮人形 小道具 琴一 柳一枝

紫上人形 〃 和琴一 桜一枝

梅壺人形 〃 小ノ琴一 藤一枝

明石上人形 〃 琵琶一 橘一枝

源氏人形 小道具なし。 これは声歌の役なり。

盤の目十五間 みそ五筋

はしめ人形を盤の端に立置、一組兩人ともに当レは一問す、む。

一人あたりたるはす、ます。また兩人ともにあたられは一問退く。

五間目に至れば琴、和琴、それ〳〵の持の道具を、五間目の所へか

さりてす、む也。

十間す、めは柳、桜の花、その所へかさる也。

十二間目に至るを一の勝とし、其後は香をきく斗也。

源氏は小道具なし。す、みやうは右に同し。但、真中のみそに立ル也

三炷のつ、けき、は五間す、む。其外はウも一問也。

香の聞きにしたがい人形を歩ませ、それぞれの楽器や花を飾るというもので、みやびな組香である。念のため、物語の「若菜下」女楽の場面（一八七、一九〇～一九一頁）を確認しよう。

秘したまふ御琴ども、うるはしき紺地の袋どもに入れたる取り出

でて、明石の御方は琵琶、紫の上に和琴、女御の君には箏の御琴、宮には、かくことごとしき琴はまだえ弾きたまはずやとあやふくて、例の手馴らしたまへるをぞ調べて奉りたまふ。

—中略—

御琴どもの調べどもとのひはてて、掻き合はせたまへるほど、いづれとなき中に、琵琶はすぐれて上手めき、神さびたる手づかひ、澄みはてておもしろく聞こゆ。和琴に、大将も耳とどめたまへるに、なつかしく愛敬づきたる御爪音に、掻き返したる音のめづらしくいまめきて、さらに、このわざとある上手どもの、おどろおどろしく掻きたてたる調べ調子に劣らずにぎはしく、大和琴にもかかる手ありけりと聞き驚かる。—中略— 箏の御琴は、物の隙々に、心もとなく漏り出づる物の音がらにて、うつくしげになまめかしくのみ聞こゆ。琴は、なほ若き方なれど、習ひたまふ盛りなれば、たどたどしからず、いとよく物に響きあひて、優になりにける御琴の音かなと大将聞きたまふ。拍子とりて唱歌したまふ。院も、時々扇うち鳴らして加へたまふ御声、昔よりもいみじくおもしろく、すこしふつつかにものしき気添ひて聞こゆ。

右の「女御の君」は明石の女御であるが、「玉葛香」衣配りのところでも触れたように、「若菜香下」では明石の女御であるべき位置に梅壺人形が登場している。また物語では、唱歌したのは主に夕霧の大將で、源氏はときどき扇をうち鳴らしていっしょにお謡いになったというのであり、「若菜香下」で源氏を唱歌の役としたのは物語から隔たっている。では、『小鏡』ではどのように書かれているだろうか。古本系京都大学本を引いてみよう（注5前掲書、五〇～五一頁）。

うち〳〵心みんとて、はるのよの、のとかにかすめるよ、御かた



くをよひたてまつりて御かくあり。これを女かくといふ。ゆふきりの大しやう、みすのにて、御ことはかりと、のへて、まいりたまふ。女三のみや、きんのこと。

—中略—

むらさきのうへ、わこん。女御殿、しやうのこと。あかしのうへ、ひわ。源氏、しやうかし給ふ。 —中略—

さて、いつれを、とりくにおもしろし。そのとき、かの御すかたともを、はなにととへさせたまふ。まつ女三のみやの御かたを、のそかせ給へは、二月中の五日はかりに、あをやきの、わつかにしたりはしめて、うくひすのはかせにも、なひきぬへく、あへかに見え給ふ。さくらのほそなかに、御くしは、ひたりみきりより、こほれかゝりて、やなきのいとのさましたり。むらさきのうへは、おほきさなど、よほとにて、やうたい、あらまほしく、わたりにも、にほひみちて、はなといは、さくらにたとへて、はるのあけほのにかすみのまより見ゆる、かはさくらの心ちす。これぞ、かきりなき御さまなる。女御のきみは、こたかきさしより、かたはらにならふはななく、さきこほれたる、ふちの心ちして、よしありて見えたまふ。かゝる中に、あかしのうへは、けをさるへけれども、あらまほしく、もてつけて、五月まつ花たちはなの、花もみも、おしおりたる心ちす。

右のように古本系京都大学本では、「源氏、しやうかし給ふ。」となっている。「若葉香下」の考案者は、おそらくこのような記述によって、唱歌した人物を源氏としてしまったのではなからうか。

女樂の席に登場させられる夕霧は、野分巻での思いがけない紫の上の垣間見以来、紫の上に心ひかれ、その後の物語の中では、六条院を第三者の視座から客観視する人物として描かれていると考えられる。御簾の外から女君たちの楽の音と「御けはひ」を聞いて、それぞれの人となり

を想像する夕霧ゆえに、高まる感興に拍子を取り、唱歌したのではないだろうか。しかし『小鏡』では、「ゆふきりの大しやう、みすのにて、御ことはかりと、のへて、まいりたまふ」と言及されるだけで、女樂の場面からは外されてしまっている。「若葉香下」に夕霧が登場しないのは、『小鏡』における夕霧の存在の矮小化と関わりがあると思われる。

なお、第一系統京都大学本以外の諸本でも、唱歌したのは源氏となっているが（ただし「女樂」の記述がない第四系統大阪市立大学本、第五系統諸本、第六系統本を除く）、第一系統宮内庁書陵部本などでは、楽器や花木の記述が一部欠けており、「源氏千種香」と完全には対応しない。詳細は資料5を参照されたい。

### まとめ——「源氏千種香」と『源氏小鏡』諸本の関係の整理——

第二章で、「源氏千種香」の巻順、「簾木香」「玉葛香」「梅枝香」「若葉香下」の内容について、『小鏡』諸本と比較した。その結果明らかになったことをまとめてみる。

一「源氏千種香」の「関屋香」「蓬生香」「竹川香」「紅梅香」のならば順と巻序が同じである『小鏡』は、第一系統第一類京都大学本・第二類宮内庁書陵部本・第四類国会図書館本（古活字版）、第二系統神戸親和女子大学本（無刊記整版）、第三系統第二類国文学研究資料館本・第三類天理図書館本、第四系統神戸宮文庫本・大阪市立大学本であった。二「簾木香」の証歌は、このままの形では『源氏物語』諸本や諸注釈書には見当たらないが、『小鏡』の多くの系統では「簾木香」と同じ形で載せている。ただし整版本である第二系統神戸親和女子大学本だけは物語本来の形であり、第五系統のうちの京都大学本（飛鳥井重雅筆）と第六系統京都大学本にはこの歌が見られない。

三「玉葛香」衣配りでは、人物と衣装の組合せが物語よりも簡素化されていて、人物と衣装の色だけで表現されているが、明石の姫君である



べきは「むめ壺」とされていることを除けば、人物と衣装の色の組合せは、第一系統京都大学本、第三系統第二類国文学研究資料館本、第四系統大阪市立大学本、第五系統京都大学本とすべて一致する。

四「梅枝香」薫物合では、物語と異なり薫物合の場面に朝顔の前斎院は登場せず、また人物と薫物の組合せでも、明石の御方は薫衣香でなく黒方になっている。これは、第一系統三本、第三系統都立中央図書館本、第四系統神宮文庫本、第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）の記述と一致する。

五「若菜香下」の女楽で、女君たちの担当する楽器と、女君たちを喻えた花木は物語と同じであるが、夕霧ではなく源氏が唱歌した人物とされていることは物語と異なる。楽器・花木・唱歌者の三点で「若菜香下」と一致する記述を持つのは、第一系統京都大学本、第三系統第二類都立中央図書館本・国文学研究資料館本、第四系統神宮文庫本である。以上に検証した「源氏千種香」の記述と『小鏡』諸本の関係を表にすると、下表ようになる。

下に見る通り、「源氏千種香」が『源氏物語』と異なる点を持つ巻順、「簀木香」証歌、「玉葛香」衣配り、「梅枝香」薫物合、「若菜香下」女楽、のすべてにおいて「源氏千種香」と一致するのは、注5前掲書所収の『源氏小鏡』諸本のうちでは、第一系統（古本系）第一類京都大学本のみであった。それに次いでは、小異はあるものの、全く異なる項目や当該の記述を欠く項目を含まない点で、第四系統（簡略本系）神宮文庫本が近い。しかし神宮文庫本の「簀木香」証歌の「その色や」は単純な誤写として処理できるとしても、「玉葛香」の「柳」と「柳うら」の相違は無視できない。全体として、京都大学本系統より神宮文庫本系統の方が依拠本に想定するにふさわしいとは言えないであろう。

この五つのことだけで、古本系京都大学本の系統を「源氏千種香」の依拠本と断言するのは飛躍があるとしても、それに近いものを用いたか

# 「源氏千種香」の記述と『源氏小鏡』諸本の関係

○ 一致またはほぼ一致  
× 一致しないもの  
△ 近似するが依拠関係は認めがたいもの  
／ 該当する記述がないもの

	第一系統 1 京都大学本 (伝持明院基春筆)	第一系統 2 宮内庁書陵部本	第一系統 3 国会図書館本 (古活字版)	第二系統 4 神戸親和女子大学本	第三系統 5 都立中央図書館本	第三系統 6 国文学研究資料館本	第三系統 7 天理図書館本	第四系統 8 神宮文庫本	第四系統 9 大阪市立大学本	第五系統 10 天理図書館本 (伝飛鳥井宋世筆)	第五系統 11 京都大学本 (飛鳥井重雅筆)	第五系統 12 天理図書館本 (連蔵筆)	第六系統 13 京都大学本
『源氏小鏡』諸本	○	○	○	○	×	○	○	○	○	／	×	／	×
巻順	○	○	○	○	×	○	○	○	○	／	×	／	×
証歌	○	○	○	×	○	○	○	△	○	○	／	○	／
玉鬘香	○	×	×	×	／	○	×	△	○	△	○	／	／
衣配り	○	○	○	×	○	×	×	○	／	○	×	／	／
薫物合	○	○	○	×	○	×	×	○	／	○	×	／	／
若菜香下 女楽	○	×	×	×	○	○	×	○	／	／	／	／	／

という見当づけは可能である。具体的な依拠本を絞り込むことは今後の課題として残るにせよ、現在と異なり誰もが容易に『源氏物語』の原典を目にすることはできなかったであろうことや、中世・近世を通じて盛んに作られた『源氏物語』の梗概書の中で『源氏小鏡』は特に多く愛読されたらしく、加えて香に関わった人には連歌の人が多かったことに鑑みると、『源氏物語』原典から直接「源氏千種香」が考案されたのではなく、そこに梗概書そして連歌の教則本としても機能した『源氏小鏡』の介在があったとする想定には、十分可能性があると考えられる。そして「源氏千種香」が『源氏小鏡』古本系京都大学本系統かそれに近い本を使って考案されたとするならば、「源氏千種香」の原型は、『源氏小鏡』が版本によって読まれるようになる以前、室町時代には出来上がっていた、という推測もできるのではなからうか。

伊井氏は注3前掲書の末尾（九八一頁）で、

『源氏小鏡』は当初連歌用書の機能を持った書として出現したはずだが、読者の方は巻々の内容を知るダイジェスト版として多分に享受していった。

と述べておられるが、もしも『源氏小鏡』が「源氏千種香」の典拠として機能したのだとしたら、それは香という知的遊戯の世界での『源氏小鏡』享受であり、源氏文化の世俗化への一役を担ったと言えるよう。

本稿で扱った「源氏千種香」の内容と物語との相違点は、かねがね香の実技の場で不審視されてきた。これらの相違が何の理由もなく生じたとは考え難いことであったが、本稿は、『源氏小鏡』を直接の典拠としたという想定によって、この点を説明しようとしたものである。

ここで取り上げた五つの事象以外にも、「源氏千種香」と『源氏小鏡』との関連を考えさせる問題は存在している。「源氏千種香」の聞きの名

目には、物語には出てこない言葉が登場したり、物語の和歌を典拠しながらも名詞化されていたり、物語内容に則しながら、五語ないし七語にまとめられていたり様々なものがある。それらの中には『源氏小鏡』の寄合と同一のものがあり、単に偶然の一致とは片付けられない。巻名の表記や香之記につけられた名ものも含めて、『源氏小鏡』との関連を明らかにしていきたいと考える。

## 注

- (1) 本書を翻刻し、注と解説を付けたものに、尾崎左永子・薫遊舎校注『香道蘭之園』（淡交社、二〇〇二年）がある。
- (2) 宗祇、牡丹花肖柏、三条西実隆、村田珠光など。
- (3) 伊井春樹氏が『源氏物語注釈史の研究 室町前期』（桜楓社、一九八〇年）「第二部 中世源氏学の周辺領域 第一章『源氏小鏡』の成立と影響」の第二節の「要旨」（八二九頁）で、

『小鏡』の原初形態はおよそ百数十余の歌を持つ本文だったと思われるが（第一系統本、古本系）、室町中期になって青表紙本により全面的に異文が正され、歌や本文も増補された（第二系統本、改訂本）。これが江戸期になっては各種の版本として流布することになる。このほか古本系からの派生本として、第三系統本（増補本）・第四系統本（簡略本）・第五系統本（梗概中心本）・第六系統本（和歌中心本）に分類することができる。とまとめられ、第二節の本文、終盤（八七八頁）においては、

現存本は古本系に位置づけられた『小鏡』が原初形態であり、他の系統本はそれから派生していると認定することができである。

と述べられ、さらに第二節の注（3）（八八〇頁）において、第一系統（古本系）第一類 京都大学の伝承筆者・持明院基春について、次のように判断されている。

古本系諸本において、基春本は古形を保ち信頼するに足る善本だと思っている。持明院基春は基信の二男、天文四（一五三五）年七月美濃で没した。八十三歳（公卿補任）。当時の文化人と

して和歌・連歌を嗜み（新撰菟玖波集に二句入集）、多くの本を書写もしている。『源氏物語』関係について言えば、『口伝抄』（宮内庁書陵部蔵）・『仙源抄』（京都大学図書館蔵・橋本・天理図書館蔵）などの識語にその名が見える。

この二指摘をもとに、岩坪健氏は、『源氏小鏡』諸本集成（注5後掲）の解題（七六八頁）で、この古本系京都大学本について、その底本（京都大学附属図書館蔵）の書写年代は、おおよそ基春が活躍した頃と見てよからう。と論じられている。

(4) 『香道蘭之園』宮内庁書陵部所蔵御所本（一六三・八八五）十卷五分冊、附録一卷一冊。縦二九・二センチ、横二一・二センチ、楮紙袋綴、全四九一丁、一面およそ十行書き。蔵印「御府」。五分冊の表紙は鬱金色秋草文様、附録巻は茜色波文様で保存状態も良く美麗本。ほかに国会図書館所蔵本と宮内庁書陵部所蔵（二〇七・一五七）の別写本を参照したが、本稿の論述に影響するような内容の異同はない。なお、底本の翻字に際しては原文のままを原則とし、濁点・仮名遣い等底本の通りにした。また読解の便宜を考慮して、旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改め、句読点を付け、適宜、改行した。但し、資料1『香道蘭之園』一卷「十炷香の本来」は、読みやすさに配慮して、濁点を補った。その傍線も筆者による。

(5) 岩坪健編『研究叢書325『源氏小鏡』諸本集成』和泉書院、二〇〇五年。京都では、志野八世蜂谷宗栄・九世宗先による『香道簡条目録』、空華庵忍鎧による『十種香暗部山』『香会余談』、大坂では大枝流芳による『香道秋の光』『香道千代の秋』『香道滝之糸』『香道軒の玉水』が見られる。

(7) 「香道家。生没年未詳。正保・延宝頃の人。周斎と号す。初め京都に住し、公家諸家の組香を伝授して香人として世に知られる。延宝初年江戸に移り、同五年、山下弘永に伝授。衣山宗秀と共に関東に香道を広めた。」（『国書人名辞典 第二巻』岩波書店、一九九五年、六〇六頁）。

(8) 「生没年不詳。姓は「いやま」とも「きぬやま」とも読め、特定できない。」（神保博行『香道の歴史事典』柏書房、二〇〇三年、三五一～三五二頁）。

(9) 「生没年不詳。——中略——江戸に香道が伝わった初期の香人の代表ともいえる人物。」（『角川茶道大事典』角川書店、二〇〇二年、一三七四頁）。

(10) 「生没年不詳。紫甘翁穩置・雪朝ともいう。——後略」（注8前掲書、四二三頁）。

(11) 国会図書館所蔵本と宮内庁書陵部所蔵の別写本（二〇七・一五七）の奥書〔E〕と〔F〕の間には、

元文五庚申四月十一日自昌平授之

樺山久寛

の記述がある。

(12) 真島望「菊岡沾涼の俳諧活動」（『成城国文学』第20号、二〇〇四年）の「俳諧活動を中心とした事績（年譜）」一三～一三三頁。

注7前掲書、第三巻、岩波書店、一九九六年、五五頁。

(13) 「江戸時代——中期の俳人。——中略——江戸麻布の自邸で月次俳諧を催し、松尾芭蕉とも親交があった。——後略」（『日本史諸家系図人名辞典』講談社、二〇〇三年、四五三頁）。

(14) 真島望「菊岡沾涼の絵入俳書」（『成城国文学』第24号、二〇〇八年）五三頁。

「絵俳書も『綾錦』も、過去にわずかに散在した要素を端緒として、それを自らの編著の糧としたという点で、完全な独創ではなかったにせよ、むしろ見るべきは、それを高度にかつ大衆受けする書として昇華せしめる卓抜な編集能力なのである。」

(15) 「香道の流派で三条西流とも呼ばれる。三条西実隆を始祖とする。流儀の特色としては、香道具が華麗な時絵で、香席法度などは他流とそれほど変わらないが、手前作法は伸びやかで闊達である。」（神保、注8前掲書、二九七頁）。

(16) 相伝方式としては、

完全相伝——師匠についてその蘊蓄を極めた弟子に、その師匠から直接に免許皆伝の印可証明が与えられ、与えられた者は次に自分の弟子に対して秘伝と相伝のすべてを渡すという方式のもの。

一代相伝——伝授を受けたものの一代の間、その人にかぎり伝授する、死後はその効力を失う。



一日相伝―その日だけ相伝を受け、翌日は返伝する。

返り相伝―相伝した相手の者から、子孫の者などが「返し伝授」  
をしてもらうこと。

依勅相伝―勅命による相伝。

一子相伝―一子にだけ相伝し、他の者は子供でも伝えない。

の六種類がある。西山松之助「近世の遊芸論」(『日本思想大系 近世芸道論』岩波書店、一九七二年、六一二―六四四頁)

(17) 本書一卷後半の作法の記述からも「御家流」であることが窺える。

(18) 関屋巻に關して「関屋香」と「盤物関屋香」があるので、「源氏千種香」の実際の組香数は五十三となる。また「紅葉賀香」には「盤物にてなす時は舞楽香を用ゆ」とあり、「香道蘭之園」四巻に「舞楽香」がある。この組香は「花宴」と「紅葉賀」両巻の内容を合せて考えられた組香で、春秋優劣論を踏まえた香組である。本稿では、八・九巻所載の「源氏千種香」を研究対象としたので、今回は触れない。

(19) 香の聞きに従い、碁石(空蟬香)や絵(総合香)を取り合ったり、花(胡蝶香)や鳥(御幸香)を人形に持たせたり、御簾を巻き上げたり(橋姫香)、短冊を交わす(漂漚香、関屋香盤物)など。

(20) 「簪木香」では、主題となる「簪木」と名付けた香だけを聞き、あとは聞き捨てる。亡き藤壺への追慕が主題の「薄雲香」や紫の上の死を捉えた「御法香」、罪におののき亡くなる柏木とその幼子が主題となる「柏木香」でも、香りを聞き捨てている。また「椎本香」では、宇治八宮の出家と遷化による姫君たちとの別れを、聞き捨てと捨て香で表現し、「手習香」でも香を捨てることで浮船の不在を描出している。さらに「東屋香」では、捨て香が何であったかを考えるという趣向で、隠れ家に居る浮船を訪う薫に相応しい演出である。

(21) なお『源氏小鏡』の巻の順序が、古本系をはじめ多くの伝本で現行と異なり、一部の伝本では現行と一致することについては、伊井春樹氏(注3前掲書、八〇二―八〇三頁)が、

『小鏡』の依拠した『源氏物語』本文が別本であったことは、巻序や引用された歌・詞などによって明らかである。ところが後世いく人もの手を経ることによって、歌や本文が増補された

り、別本の異文が青表紙本によって訂正されるなど次第に変貌していった。  
と述べられている。

(22) 稲賀敬二『源氏物語』とその享受資料・笠間書院、二〇〇七年。

(23) なお第三句が、「簪木香」では「名のうきに」と記されており、第四系統大阪市立大学本の「名のうきに」と一致しているが、大阪市立大学本が「源氏千種香」の依拠本ではありえないことは、後で取り上げる「梅枝香」および「若葉香下」において、「源氏千種香」に対応する記述を欠いていることから明らかである。「さ」と「き」はしばしば誤写を起しやすい文字であり、共通の誤写による偶然の一致と考えられる。(なお【補記】参照)

(24) 淡交社刊「香道蘭之園」「玉葛香」翻刻では、「かいねり」となっているが、本稿の底本とした宮内庁書陵部所蔵御所本(一六三―八八五)では「おちくり」、宮内庁書陵部所蔵の別写本(二〇七一―一五七)と国会図書館本では「ほちゑり」となっている。おそらく三本ともに「おちくり」の間違いであろうと考えられる。

(25) これは、注5前掲書所収の諸本のうちでは、第五系統天理図書館本(二本)・第六系統京都大学本を除くすべての本に見られる。

(26) 十二世紀に集成された薫物の史料で、藤原定長(寂蓮法師・一一三九?―一二〇二)の撰とも言われる。『群書類従』遊戯部所収『薫集類抄 上』の末文(『群書類従』第十九輯、五四一頁)には、「刑部卿範兼卿奉勅抄集之也」とあり、また『薫集類抄 下』の末文(同書、五六二頁)には「右薫集類抄以寂蓮法師真跡転写」とあり、作者は特定できない、と考えられる。

(27) 淡交社刊「香道蘭之園」の「梅枝香」の解説にも、「黒方は本来「冬の香」であるから、冬の町に住み「冬の御方」とよばれる明石上の作ったものとするこの組香の配慮も、故のないものではない。」と記されている。

(28) 仁明天皇と八条宮本康親王(仁明天皇第七皇子)は親子であり、源公忠朝臣は朱雀院に仕えていた人で、三十六歌仙の一人でもある。また彼の母・滋野直子は、『薫集類抄 上』に「此二方者不伝男。是承和仰事也。延喜六年二月三日。典侍滋野直子朝臣所献也。」とある(注26前掲書、五三〇頁)。



## 【補記】

なお、注5前掲書で、『古典文庫 良基連歌論集三』に一本が翻刻されているため省略された第三系統第一類は、『古典文庫』所収本（『光源氏 一部連歌寄合之事』）によれば、巻順「簪木香」「玉葛香」「若菜香下」においては古本系京都大学本とほとんど一致し、特に簪木巻の歌の第三句が「なのうきに」である点は「源氏千種香」と同一である。しかし、「梅枝香」薫物合の記述が「たき物色、むめの花くろぼふをはむらさきの上あわせ給ふはなちるさとししゆげんじいろくさまくに出させ給ふたき物いづれもとりくにおもしろき中にも」とかなり不完全であり、やはり「源氏千種香」の依拠本にはなりえない。

## 資料1 『香道蘭之園』一卷 十炷香の本原

一 夫十炷香は組香の本元也。文亀の頃、室町家贈相国の時、三々九葉に一花を加へて、これを十炷香とす。もろくの組香は此十炷香を根とせり。さるによつて組合にしたがひ、別の香札を用ゆる事ありといへども、多くは十炷香の札を以爲所よろしきとす。

そのころ沙弥真相、志野宗信、牡丹花肖柏、一流を発し、組香二十余品あり。亦、志野宗信志野入道不寒斎宗温、父の跡を継。

其後、元和寛永の頃、後水尾の皇○女院の御所、相ともに此道をふかく好ませ給ひ、此御宇に至て万国より佳種を奉りて奇品満てり。其御代にこそあまたの組合香をなさしめ給ふとなり。凡一百余品といへども、日々夜々の御遊なりしかばその際限あらざるに、その中に勅作あり、院作あり、或は博陸大尉の組まれ玉ひし香あり。月卿雲客こゝろくに作せられ、折にふれ節にしたがひ観覧に備へられしより、多くの組香世にひろまれりとぞ。

茲に正保慶安のころ鈴鹿周斎王城の地に住んで、やんごとなきかたに入て諸家の組香をつたへ承りて、此道に就て香道の深秘をきはめ、世にしられたる深者也。延宝のはじめ東都に來りぬ。又衣山鞠負丞

宗秀は堂上方につかへて香道にふかし。周斎と交りを厚うしけり。後に仕を辞し、これも江都にくだり、周斎にたよりして住む所をほとりにす。

此両師より更伝ふる所は山下氏弘永世人也。弘永より伝ふは栗本穩置と弘永息一学に鈴鹿の奥儀は残れり。然るに中世香道しばらく盛んならざるにや、其道を失ひ組香の名のみありて其品あきらかならざる事おほし。

近代また香道流布あるにおゐて古銘をかりて新作せしめ、印本の異説あり。これらは信ずるにたらず。先の両師はあらたになせる組香をかたく制す。寛永の頃の組香二百余品あり。これに事のたらずと。近代の香道者、いにしへの志野流相阿弥流といふに准じて自流をたつる人多し。香道におゐてはあるべからず。先師、香の奥儀極めたれども自分の流儀を立るにあらず。古法を師とするもの也。ただ古実を守るを以、香道の本意たるべしとの教なり。

香の極秘は十百炷に満たるにて、門葉に伝ふべしと先師の掟也。紫甘翁門人菊岡寄邦誌 同門崔下菴書之

## 資料2 香道専門用語の解説

1 組香 数種の香を組合せ、一定の主題を表現する香のゲームの様式で、文学的主题を持つものが多い。

2 証歌 組香の主題の典拠となる和歌のこと。

3 証詞 組香の主題の典拠となる物語の言葉のこと。

4 聞きの名目 組香の主題や出典文学に拠る言葉が指定され、そのことばで答える。答えは名乗り紙（回答用紙）に書く。

5 炷繼 香名を連歌的に繋げて炷き続けるもの。

6 空炷 部屋や家具、着物や装身具に香りを炷きしめること。

7 聞香 聞香（ぶんこう）とも読む。聞き香炉に炭団を活け、銀葉の上

に載せてくゆらした香木の匂いを嗅ぐことであるが、嗅ぐとは言わず香りを聞くとする。

## 8 盤物ばんもの

盤立物ともいう。盤上で立物と呼ばれる人形をはじめ、様々な形象を用い、香を聞き当てることに立物を移動させて楽しむもの。組香のひとつで香席に女性が参加するようになり、視覚的な遊戯性を高めるものとして生まれた。東福門院和子の後水尾天皇への入内を契機に江戸中期にかけて流行したとも言われる。

(神保博行『香道の歴史事典』柏書房、二〇〇三年、四〇九頁)

## 9 一炷いちちゅう

香を一つ炷くこと。

10 一炷開き 一炷香を聞いて、すぐに答え合せをすること。盤物のゲームでは、香を聞き当てることに立物(人形など)を移動させてゲームを進めるため、一炷開きとなる。

11 一炷開き その都度答え合せはせず、最後にまとめて答え合せをする。従って「一炷開〇度」(一炷開きを〇回行うの意味)と表現される。

## 12 香種数

使われる香の種類の数のことで「香品数」とも言う。

## 13 試こころみ

本ゲームで使われる香をゲームの前に聞いてその香りを記憶すること。

## 14 客香

試のない香のことで、客という字のウ冠をとって「ウ」と略され、これを聞き当てる得点が高くなることもある。

## 15 聞捨ききすて

香を聞いてもその答えを記さないこと。

## 16 捨香すてかう

試をした香を、ゲームの最初や途中で打ちませた上で、いくつか取り除き、敢えてその香を聞かないことであり、ゲームによってはその捨てた香が何の香りであったかを当てたりするものもある。

## 17 札打ち

香札で答えること。香札は十二枚一組で小箱に納められ、

この小箱を十客一組、計百二十枚が札箱に納められる。札の大きさは縦二・七センチ、横一・二センチが標準。札の表はさまざまであるが花形文が一般的。札の裏は数字の一〜三が記されたものが各三枚で、その内「月」と「花」の模様がついたものが各一枚ある。さらに、三枚には「客」または「ウ」(客香のウ冠をとって「ウ」とする)の字が記されている。材質は紫檀・黒檀が多い。

## 補足

香筵(香会)の客(聞き手・連衆)は十人が基本。香筵で使う香木を提供する人を出香(者)と言い、香手前をする人を香元と言うが、香元が香木を用意することが多い。また客全員の答えを取りまとめて、一枚の紙に記録する係を文台(執筆・記録)と呼ぶ。

この記録は「香之記」と呼ばれ、その香筵での勝者で席次の高い者に贈られる。

## 資料3・4・5について

表中の番号は各々、左記の『源氏小鏡』に対応する。

- 1 第一系統(古本系) 第一類 京都大学本(伝持明院基春筆)
- 2 第一系統(古本系) 第二類 宮内庁書陵部本
- 3 第一系統(古本系) 第四類 国会図書館本(古活字版)
- 4 第二系統(改訂本系) 第二類 神戸親和女子大学本
- 5 第三系統(増補本系) 第二類 都立中央図書館本(三井寺聖護院系統)
- 6 第三系統(増補本系) 第二類 国文学研究資料館本(道安系統)
- 7 第三系統(増補本系) 第三類 天理図書館本
- 8 第四系統(簡略本系) 神宮文庫本
- 9 第四系統(簡略本系) 大阪市立大学本

- |    |              |                 |
|----|--------------|-----------------|
| 10 | 第五系統（梗概中心本系） | 天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆） |
| 11 | 第五系統（梗概中心本系） | 京都大学本（飛鳥井重雅筆）   |
| 12 | 第五系統（梗概中心本系） | 天理図書館本（連藏筆）     |
| 13 | 第六系統（和歌中心本系） | 京都大学本           |

資料3 『源氏小鏡』 諸本 玉鬘巻での「衣配り」の記述

空蟬の尻	末摘花	花散里	明石の御方	玉鬘	明石の姫君	紫の上	
くちなし色	やなき	はなた	しろき	くれなゐ	こうはい	あか	1
くちは	やなき色	花た		しろき	こうはい	あかつき色	2
くちなし色	やなきうら	はなた色のきぬ			しろき小袖	あかいろのきぬ	3
		あさはなたのかいふのも ん、をりさまなまめきたれ と、にほひやかならぬに、 いとこきかいねりくして		くもりなく赤き山ふきの花 のをりものも、ほそなか	さくらのほそなかに、つやゝ かなるかいねり取そへて	紅梅のいといたく、もんう きたるに、ゑひそめの御こ うちきいまやう色のすくれ たる	4
くちなし色	柳色	はなた色	しろききぬ	くれなゐ	こうはい	あかき色	6
くちなし色	やなき色	はなた	あさはなたの色	くれない	こうはい	こうはいのもん、いとからめ きたるゑひ染めのこうちき、 いまやう色のすくれたる	7
くちなし色	柳うら	花田色	しろき色	紅	紅梅	あか 色	8
くちなし色	柳色	はなた	しろき	紅	こうはい	赤 色	9
くちなし色	柳色	はなた色	色 <small>（白きいろカ）</small> きいろのきぬ	紅	こうはいのきぬ	あか 色のき ぬ	10
くちなし	柳色	はなた	白地	くれなひ	紅梅	赤 色	11

## 5 第三系統第二類都立中央図書館本（三井寺聖護院系統）

きぬくばりといふ事、たまかつらのまきのすゑにあるなり。これは、十二月のすゑに、けんしの御かたより、正月のしやうそくのために、色々のきぬをさま／＼したて、ひろぶたにをきかさねて、むらさきのうへ、だいしやうにおほせられけるは、「これ御らんしあて、人々のしなにしたかひて、にあふやうにおほしめし、あてかわせ給へ」と申させたまへは、さらはとて、あか色、こうはい、くれなゐ、しろこそて、はなた、やなきうら、くちなし色、此色／＼あなたこなたへ御ぬしにしたがひて、まいらせ給ふ中に、あかしのうへの御かたへは、色もわか／＼うつくしきゑりて、まいらせ給ふ。むらさきのうへ、よろつ御はからひ

にて、御ころもかへなど、此よりまいらせ給ふか、けんしの御心みたてまつらんかために、かく申給へり。

## 12 第五系統（梗概中心本系）天理図書館本（連蔵筆）

「たまかつらのまき」はあるが、衣配りの文章はない。

## 13 第六系統（和歌中心本系）京都大学本

され、此巻に、「きぬくはり」といふ事有。源氏、女御達の御方へ、十二月の末に、色々の御しやうそくをそ送り給ふ。

## 資料4 『源氏小鏡』諸本 梅枝巻での「薫物合」の記述

源氏	1	し、う <small>（侍従）</small>	はい花 <small>（梅花方）</small> ほう	くろほう <small>（黒方）</small>	かえう <small>（荷葉）</small>	朝顔の前斎院
源氏	2	し、う <small>（侍従）</small>	はいくわ <small>（梅花）</small>	くろほう <small>（黒方）</small>	かよう <small>（荷葉）</small>	花散里
紫の上	3	し、う <small>（侍従）</small>	梅花 <small>（梅花方）</small> ほう	くろほう <small>（黒方）</small>	かえう <small>（荷葉）</small> のほう	明石の御方
源氏	4	侍従 <small>（侍従）</small>	はい花 <small>（梅花）</small>	くろゑかう <small>（黒衣香カ）</small>	かえう <small>（荷葉）</small>	くろほう <small>（黒方）</small>
源氏	5	じ、う <small>（侍従）</small>	むめのはな <small>（梅花方）</small> のほう	くろほう <small>（黒方）</small>	荷ようほう <small>（荷葉方）</small>	
源氏	6	くろほう・し、う <small>（侍従）</small>	三種 <small>（梅花）</small> 中 <small>（梅花）</small> にははいくくろほう <small>（黒方）</small>	くんゑかう <small>（黒衣香）</small>	かよう <small>（荷葉）</small>	くろほう・し、う <small>（侍従）</small>
源氏	7	し、うほう <small>（侍従方）</small>	梅花 くろほう	くんゑかう <small>（黒衣香）</small>	かえう <small>（荷葉方）</small> ほう	
源氏	8	し、う <small>（侍従）</small>	梅花ほう <small>（梅花方）</small>	くろほう <small>（黒方）</small>	かよう <small>（荷葉方）</small> のほう	
源氏	10	し、う <small>（侍従）</small>	梅花のほう <small>（梅花方）</small>	くろほう <small>（黒方）</small>	かよう <small>（荷葉方）</small> のほう	
源氏	11		くろほう <small>（黒方）</small>	かよう <small>（荷葉）</small>	ちしう <small>（侍従）</small>	

## 9 第四系統（簡略本系）大阪市立大学本

正月卅日の頃、源氏、六条のゐんにて、たき物合あり。これは、明石はらの御姫君、后にまいり給ふ御いそき也。かうとも、御かた／＼へく

はりて、いとみあはせたまふ。あさかほのさいゐんの御かたより、ちり過たる梅のえたに、御文付て、こんり、のつほにたき物入て、五ようのえたに付て、白きつほにはたき物入て、むめをゑりて付られたり。その



歌に、

51 花のかはちりにし枝に留らねと移らん袖にあさくしまめや  
と有し也。

又、兵部卿の宮、さま／＼のかうともをはんして、帰り給ふ。

12 第五系統（梗概中心本）天理図書館本（連蔵筆）

薰物合の記述なし。

13 第六系統（和歌中心本系）京都大学本

明石の姫君、春宮にまゐり給はんとはいそめきに、六条院にて焼もの  
あはせをし給ふ。頃は正月のすゑつかたなるに、前斎院と申方より、散  
過たる紅梅の枝に御文付て、紅るりの壺にたきもの入て、贈給ふ。おな  
しく歌、

137 花の香は散にし枝にとまらねとうつらん袖に浅くしまめや

御返事、源氏、

138 はなのえにいと、心をしむるかな人のとかめん香をはつらめと

資料5 『源氏小鏡』 諸本 若菜下巻での「女楽」の記述

	女三の宮	紫の上	明石の女御	明石の御方	源氏
1	きんのこと やなき	わこん かはさくら	しやうのこと ふち	ひわ たちはなの花も実も	しやうか
2	きんのこと やなき	かは桜	しやうのこと 藤	ひわ	しやうか
3	きんのこと やなき	かはさくら	しやうのこと ふち	ひは 花たちはな	しやうか
4	きんの御琴 柳	わこん さくら・梅	さうの御こと 藤	ひわ さ月の花たちはなの実も	しやうか
5	きんのこと やなき	和琴 かはさくら	しやうのこと 藤	びわ はなたちはなの花をも 実をも	しやうか
6	きん やなき	わこん 桜	しやうのこと 藤	ひは 花たちはなの花も実も	しやうか
7	きんのこと あをやき	わこむ こすゑの花	しやうのこと 藤	ひわ 花たちはなをみ	しやうか
8	きんの琴 柳	わこん かは桜	箏 藤	琵琶 花橘の花も実も	しやうか

9～13の『源氏小鏡』諸本の若菜下巻には「女楽」の記述が見られない。これらの諸本で語られていることを簡条書きで提示する。

9 「若なの下にはく」 住吉詣・蹴鞠での垣間見・女三の宮懷妊

落葉の宮のこと

10 「わかな下」 住吉詣・蹴鞠での垣間見・紫の上のなや

み・女三の宮懷妊・柏木との密事露見

11 「わかな下」 住吉詣・蹴鞠での垣間見・紫の上のなや

み・柏木との密事露見・落葉の宮のこと

12 「女三のみや、・・・」 蹴鞠での垣間見・猫・紫の上のおわづら

い・柏木との密通・密事露見・柏木死去・

薫誕生

柏木の笛の後日譚まで

13 「若菜下」 住吉詣・柏木との密通・密事露見

# A Quest for Reference Books of “Genji chigusa kō”

TAKEI Masako

The Graduate University of Advanced Studies,  
School of Cultural and Social Studies,  
Department of Japanese Literature

“Genji chigusa kō” is Included in Chapters 8 and 9 of *Kōdō ran no sono* (Book of Kōdō), that is a text written in the early eighteenth century on *kōdō*, the Japanese art of incense. It has more than 200 kinds of *kumikō* (games of judging the difference between fragrances) and manners of *kōdō*. This book was edited by Kikuoka Senryō. He was a craftsman, writer, and haiku poet.

“Genji chigusa kō” has fifty-three kinds of *kumikō*. They are all related to *The Tale of Genji*. But there are some differences between these *kumikō* contests and the story found in the *Genji*. *The Tale of Genji* was read during the medieval and early modern periods in Japan, and many digest versions of the tale were produced. *Genji kokagami* in particular was read by many people. This book was not only a digest of the *Genji* but also served as a sourcebook for composing *renga*. This article deals with some differences between the *kumikō* games mentioned in “Genji chigusa kō” and the story of such contests in *The Tale of Genji*. For example, in examining ‘Hahakigikō’, ‘Tamakatsurakō’, ‘Umegekō’, and ‘Wakanakō’, I noticed that there are some possibilities that “Genji chigusa kō” may in fact be based on *Genji kokagami*. There are six extant variations of *Genji kokagami*, and “Genji chigusa kō” may be connected with the oldest of these.

The aim of my thesis is to study the relation of these incense games to literature, and to show clearly how “Genji chigusa kō” was influenced by *Genji kokagami*.

**Key words:** “Genji chigusa kō,” *Genji kokagami*, digest book, *renga* poems, *kumikō*